

〔目的〕 近年、高校生の家庭科学習に関しては、男女共修の是非、教科内容の検討等、多くの論議があり、家庭科教育の望ましいあり方が求められている。それを採る手がかりとして、高等学校「家庭一般」の学習内容に対する高校生の興味と関心、及び将来、役に立つと考えるか否か、又、男女のうちどちらが履習したうよいと高校生自身は認識しているか等を、男女共学校、女子校、いわゆる受験校、非受験校、家庭科共修実施校、非実施校別に検討する。又、高校家庭科が男女共修と行った場合を想定し、家庭経営学を中心とした学習項目についても、男女高校生がいかなる関心や対応を示すかを、明らかにしたい。

〔方法〕 昭和54年3月中旬より5月中旬に、各高等学校の家庭科担当者及び担任を通じて、質問紙による集合調査を行なった。調査対象は、公立高校の男・女2、3年生。調査校は、京都1校、東京2校、長崎2校で、合計5校。回収率は100%である。東京TN校では、「家庭一般」の男女共修が2学年選択、3学年必修、京都KM校では、2学年必修という履習方法が実施されている。

〔結果〕 ① 男女差により「家庭一般」の学習内容に対する興味・関心、誰が履習するかについて大きな差異がある。② 共修校の男子生徒の方が、一般的に家庭科学習内容への関心が強い。③ 非共修校の男子は、「家庭一般」の学習項目の教項目の内容にわたって、女子が履習するものと考えられる傾向が強い。